バッタの生態　カマキリ研究

昆虫学書籍 相次ぎ出版

弘大教員ら執筆「面白さ感じて」

弘前大学の教員らが執筆した書籍「バッタの大発生の謎と生態」（北隆館）と「カマキリに学ぶ」（同）が相次いで出版された。サバクトビバッタの大発生などで近年注目を集めるバッタの生態や、広く信じられてきた「カマキリの雪予想」を覆す研究成果など、昆虫研究者のみならず広く興味を引く話題。もとより昆虫研究が盛んな弘大であり、関係者は「研究の中での苦労話なども盛り込んでいる。ぜひ昆虫の面白さを感じほしい」とする。（西尾瑛）

安藤名誉教授（右）と菅原助教

同大は弘大農学部長や日本昆虫学会長などを務めた世界的な昆虫学者の故・正木進三教授をはじめ、最近では著書「バッタを倒しにアフリカへ」で知られる前野ウルド浩太郎さんら多くの研究者を輩出。

今年4月に出版された「バッタのー」は、同大OBでもある田中誠二博士が編者を務め、同大農学生命科学部の菅原亮平助教（38）も著者として加わった。同書ではサバクトビバッタとトノサマバッタの研究を主に取り扱い、サバクトビバッタの大発生のメカニズムや防除法、また大発生の原因でもある、混み合うと見た目や行動、生理状態も変化する「相変異」などについて、国内のバッタ研究者がさまざまな角度から成果を紹介しており、日本におけるバッタ研究の総まとめの一つとも言える一冊。

菅原助教は体色の制御について担当しており、「相変異は日本とあまり関係なさそうに感じるかしれないが、弘前のバッタも相変異を起こすし、過去には日本でもトノサマバッタの大発生が起こった例もある」と説明。「研究ってこうやってしているんだとか、研究者の日常とかの部分も楽しんで読んでもらい、興味を持ったら掘り下げてほしい」とする。

8月に出版された「カマキリー」は、同大の安藤喜一名誉教授（82）が、定年退職後17年間にわたり研究を続けたカマキリ研究についてまとめたもの。カマキリはふ化幼虫からの飼育が難しく、研究者が少ない中、自宅の庭にプレハブの昆虫飼育室を作って取り組んだ。

もとは、卵が休眠するかどうかの興味で始めたが、1年ほどたった時、「カマキリが高いところに卵を産むと大雪、低いところに産むと少雪」というカマキリの雪予想というものがあることを知り、それまでの研究ですでに、雪の中に埋もれていた卵胞が正常にふ化することが分かっていたため、その点についても研究を続けた。2019年までに全国各地で9000を超える大カマキリの卵胞を採集し、卵の高さを測った。その結果、雪が多く降るところで卵が高い位置にあることはなく、「雪の下にあっても、雪の上にあっても、問題なく冬を越せる。むしろ雪の下の方が越冬率は高い」と安藤名誉教授。ほかにも、卵胞は野焼きでも、海水に漬かっても死なないなど、生態や飼育法などについて詳しく紹介しており、「これを読んで昆虫って面白そうと思ってもらえれば。まだまだ分からない昆虫もたくさんあって、仕事を持ちながら虫研究をしている人もたくさんいる。昆虫って本当に面白い」と笑顔を見せた。

上記の画像は，当該ページに限って”陸奥新報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。